

SEXTO CONGRESSO INTERNACIONAL DE LINGÜÍSTICA MISSIONÁRIA

ILCAA, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa,
TUFS, Tokyo University of Foreign Studies
Tóquio (Japão)

2010年3月16日～19日

新世界の発見以降、ヨーロッパ人たちは新大陸に自らのヘゲモニーを確立するため、土着の民族に対してヨーロッパ的なものを敷衍し、その文脈において植民化、キリスト教化が為されたが、と同時に、アメリカ大陸の土着の言語の研究と記録もおこなった。同時期、アジア、とりわけ極東およびロシア、そしてすぐのちにアフリカにおいてキリスト教宣教師たちの活動が活発になりはじめた。19世紀初頭、これらの国々では宣教師たちの言語を介して、アメリカ大陸と同様に、土着の言語研究および記録がおこなわれた。

本国際会議は、宣教師の言語の調査研究のアクチュアルな動向を知ることが主たる目的としている。ここで取り扱われる事柄は時代的な限定は持つが（主に1492年～1850年に焦点が当てられる）、空間的な限定を持つことはない。今般の会議は、様々な大陸における、ドミニコ会、フランシスコ会、イエズス会といった様々な修道士による、ラテン語、スペイン語、ポルトガル語、英語、フランス語、オランダ語といった異なる言語で記述された相互に関連する言語形態の検討をその射程におさめている。

本会議は、あらたな地平を開き、あらたな視点を創造するために、国家と言語の国境を横断する規律を「グローバル化」したいとする願いを以て開かれる。

研究プログラム

3月16日

10時30分 カルロス・アスンサオン（トラズ・オス・モンテス イ アルト・ドウロ大学（ポルトガル））「ポルトガルの宣教活動と東洋における言語間接触について」

15時 石川博樹（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)）「ブラガ地方文書館所蔵MS779の起源と来歴：北部エチオピア史におけるその重要性に関する新事実」

3月17日

10時30分 ゴンサーロ・フェルナンデス（トラズ・オス・モンテス イ アルト・ドウロ大学（ポルトガル））イエズス会士ペドロ・ディアスの「アンブンド族使用言語のあり様(1697)」に見るアンゴラ人たちの土着語文法記述について

3月18日

11時45分 オットー・スワルツ（アムステル大学（オランダ））「インドにおける(16世紀から18世紀)ポルトガルの伝統的宣教師文法に見られる統語法類型論について」

12時15分 マリア・ド・セウ・フォンセカ（エヴォラ大学（ポルトガル））「コンカニ語文法についてのポルトガルにおける研究動向」

14時30分 エリザ・アツコ・ペレス・タシロ（サンパウロ大学（ブラジル））「日本語に見る固有語とその概念：イエズス会士の思想の持続について」

15時 岸本恵実（国際基督教大学（日本））「日本におけるイエズス会士編纂辞書比較：*Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) e *Vocabulario da lingoa de Iapam* (1603–1604)」

3月19日

15時15分 オルガ・フェレイラ・コエーリョ（サンパウロ大学（ブラジル））「Dias(1697)とMamiani(1699)における“caso”概念の進展について」

ウェブ情報

ウェブページ: <http://www.joao-roiz.jp/MLG2010/index.html>

プログラム: <http://www.joao-roiz.jp/MLG2010/program>